

本 部 企 画

映画「さとにきたらええやん」 監督トークショー

映画監督 重江良樹

プロフィール

1984年 大阪府出身。ビジュアルアーツ専門学校大阪卒業後、映像制作会社勤務を経てフリー。

2008年 「こどもの里」にボランティアとして入ったことがきっかけで撮影し始める。

映画「さとにきたらええやん」は「こどもの里」を舞台に、多くの問題を抱え、悩みながらも懸命に生きる子どもたちと、彼らに全力で向き合う職員や大人たちの姿を描いたドキュメンタリーである。本作が初監督作品。

重江 おはようございます。ただいまご紹介いただきました重江と申します。本日は朝から皆さんお集まりいただきまして、ありがとうございます。ちょっと座らせてもらいます。大体、映画と一緒にこんな形で呼ばれることがあるんですけども、映画を見終わってから、ちょこっといろんな話をして、皆さんと質疑応答するというパターンが多いんですけど、なかなか初めてぐらいのパターンで。この映画を見たことがある方いらっしゃいます？ ありがとうございます、パラパラと。何の話をしようかなと考えているんですけどね。映画の話も、内容の話はあまりできないところと。

今、ご紹介がありましたように、大阪の大阪市西成区ですね、大阪は24区の行政区なんですけ

れども、西成区の中に釜ヶ崎という町がありまして、行政名称『あいらん地区』とか言われている町ですよ。町の名前を聞いたことがあられる方ってどれくらいいらっしゃいますか。結構、ですよ。ありがとうございます。この照明で皆さんの顔は見えないんですけど、学生さんから、一般の方までいらっしゃる感じですね。東京でしたら山谷とか、横浜の寿町とかと同じような感じのかなとは思うんですけども、釜ヶ崎ですね。日雇い労働者の町と言われる町で、寄せ場とか寄り場とか言われますけれども。大阪というか西のほうじゃ、あそこに行っちゃいけませんという町ですよ。危険な町と言われていて、日本のスラムやみたいなやゆのされ方もして。

この原因というのは、一番有名なのは暴動ですかね、やっぱり。バーツと暴動が起きる町とか、『警察密着24時』とかで、西成あいらん地区の何ちゃらかんちゃらみたいとか、そういうのがすごいあったりとか、事実なところもあったり、事実でないところもあるんですけども。でも、あと野宿とか、そういう問題がありますし、結核の罹患率とかも、今でも突出して日本で1番。覚せい剤とか、いろいろたくさん道端で売られていたけど、最近はちょっと減っているんですけど、そういったことの問題もあったり、あと生活保護ですね。生活保護の受給率が全国1位の自治体なんですよ。住民の4人に1人が受けているぐらいの感じなんですけれども、こんな話。ちょっとなん

か悪いことばかり言っているんですけど、僕、今、釜ヶ崎に住んでいて、釜ヶ崎のための、名誉のために今言っておきますけど。いろんなね、昼間から酔っぱらって、こうやっているおっちゃんもいますけど、そんなおっちゃんもいる中で、すごい温かみのあるおっちゃんとかもいて、すごい面白い町なんで、特に若い学生の方とか、ぜひ一度お越しいただけたらなと思うんですけども。

そんな町の釜ヶ崎という、600メーター四方ぐらいの本当に小さな西成区の北のほうの11分の1ぐらいの小さな面積の中に、人口が約2万人というすごい人口が密集しているんですけども、そんな町の真ん中に、こどもの里という児童館があります。ちょうど西成警察署、要塞みたいななんか、ガンダムとかに出てきそうな要塞みたいな警察があるんですけど、その隣のこどもの里という児童館があります。こどもの里なんですけれども、古い児童館なんですけど、2、3年前にNPO法人になりました。やっている事業内容としては、留守家庭児童対策事業、学童保育ですね。対象は小学生で、大阪市だと両親が共働きとか、ひとり親とか、いろいろと縛りがあるんですけど、そういう学童の事業をやっていたり、乳幼児とか、保護者さんの子育てサロンみたいな事業もやっています。これ二つは大阪市の事業でやられていますね。映画を見ていただいたら分かるんですけども、1階が子どもたちの遊び場、ホールになっていて、2階が食堂であったり図書室になっていたりという部分です。2階にも、子どもたちが一時的に宿泊したり、生活していたりという部屋もあるんですけども、2階はこんな感じで、3階が子どもたちが住んでいるというスペースになりますね。映画の中でちょいちょい出てくるんで、また注目していただけたらなと思うんですけども、決して広くはない3階建ての建物でいろんなことが行われています。

学童と子育てサロンの他には、小規模住居型児童養育事業、ファミリーホームですね。ざっくり言ったら里親という国の制度になるんですけども、大舎制の大きな施設、社会的養護の必要な子

が大勢で暮らす施設よりは、国の方針として里親、個人のお宅であるとか、そういった小規模のファミリーホームのような所に社会的養護が必要な子どもたちに住んでもらおうということで、今、国が力を入れているみたいで。荘保さん、映画に出てくる荘保館長ですね。里親の資格を持っていますので、そこで里親をしながら、里子の世話ですね。定員は6人なんですけれども、そういった子たちと一緒に生活をしている生活の場というのがありますね。さっき、ちらっと言ったように一時宿泊とか、行ったりとか、こういうようなことが自主事業でやられているんですけど、ちょっと朝起きるのが難しいとか、保育園とかの登園が難しいというときに、送り迎え、学校とかそういうことをしたり、自主事業としていろいろやっています。

NPOになったのが、自立援助ホームという新しい事業というか、どうしても、こどもの里に来ていた子どもたちとかで、今、ファミリーホームのほうは女の子ばかりですけども、男の子のほうでも、義務教育が終わって社会には出てみたもののとか、高校には行ってみたものという中で、やっぱりいろいろと難しいことがあって、なかなか自分で生活ができないとか、ちょっと何か問題が起きてしまうとか、そういったことがありますね。そういった子どもたちの共同の生活の場として、職員がいる中で子どもたちの自立をサポートするという目的で、こどもの里から自転車で5分、10分ぐらい行った所に自立援助ホームという形で、若者が青少年の生活の場という形でそういった事業もやられています。

映画を見てもらうのが本当は一番早いんですけど、こどもの里ってどういった場かと言いますと、必要とする人は誰が来てもいいという、本当に誰が来てもいいという場なんです。今ちょっと事業の話をつらつらとしましたけれども、例えば乳幼児とか、その保護者向けだったら乳幼児しか来られない、学童だけだったら小学生だけ、しかもいろいろな制限がかかる、縛りがありますよね。中学生は、高校生はとってくるんですけど、こ

どもの里、いろんな事業の補助金をもらいながら自主事業というか、0歳から20歳過ぎてともいうところで、誰が来てもいいよというところでやられています。

僕、全然、専門家でも何でもないので、ただの映像屋さんで、こどもの里で10年ほど関わっていますけど、見聞きしたこととか、撮影中に感じたこと、知ったことなんかを僕の主観でしゃべっているだけなんですけれども。所得とか、そういったことに関係なく、子どもたちが自分たちの意思でこの場に來れる、自分たちの判断でいられるというのは、すごい大きなことなんじゃないかなというふうに思います。特に、小学生なんかはいろんな居場所がつくられたりもしていますけど、中高生なんかは本当に居場所がないんですね。公的なというか、居場所がないので、大きい子にとっても意味があるんじゃないかなというふうに思います。横並びの同学年の子どもたちだけでなく、縦割りでいろんな子が來ます。年齢に関係なく、障害のあるなしとか関係なく、国籍とかも関係なく、本当にいろんな子たちが來ます。釜ヶ崎もそうだし、西成区という釜ヶ崎近辺、周辺でもいろんな人たちがいて、その辺の子どもたちが自分の意思で來られるということどもの里ですね。

すごい小さいときから利用していて、小学生になって、中学生になって、職員とかはずっと変わらず、莊保さんは、ここで40年以上やられているんですけども。他に入ってきた職員さんも、みんな長いこと定着していて、ずっと自分が小さいときから自分のことを知ってくれている、ちゃんと関係性がある。いろんな子が來ているんですけど、普通の家庭と言われるところの子どもも來ているし、いわゆるちょっとしんどい、貧困家庭なんて言われる子もいるんですけども。地域的に、経済的な貧困な地域ではあるし、大阪が子どもの貧困率でいったら全国2番目で、その中で大阪市の西成区って、やっぱりいろんな意味ですごい貧困率が突出して高いですね。相対的に貧困率が高い地域なんですけれども、お金の無いもあるし、経済的な貧困のこともあるし、家庭環境

の難しいというところもあつたりもするんですけど、そんないろんな子どもの中で子どもたち、基本的にこどもの里って人の嫌がることはしないぐらいのルールしかなくて、いわゆる自由保育で、広いホールで子どもたちが自由に何して遊んでもいいという場所なんですけれども。もちろん職員さんもいますけど、あまり口を出さないところで、自分たちのやりたいことを思い切り、みんな遊ぶんですけれども。

そういった職員さんとか、ずっとつながりがある中で、小学生なり中学生って、自分が例えば家庭であるとか、学校の交友関係であるとか、ちょっと何かにつまずいたり、ちょっと心がしんどいなと思ったときに、職員に話せる。親にも話せない、先生にも話せない、でも、ここの職員には相談できる。何でも話せる。なぜかという、自分がちっちゃいときから関係性がある。遊んでくれている。自分の親のことも知っている。家庭のことも知っている。すごい信頼関係が強いんですね。もちろん、この児童館の職員だけというあれじゃないんですけども、誰かの居場所なんですね。今、特に言われていますけど、家庭が駄目で、学校が駄目で、こういう場が誰かの居場所に、そういうふうな話せる大人がいるというのは、すごい子どもたちにとって有用なことだと思うし。僕の場合ですけども、女の子は割と自分の感情を抑えたりもするんちゃうかなと思うんですけど、男の子は思春期とかになつてきたら、しゃべらないとか黙るといふか。そういうときでも、子どもは特に、おうちの中のこととか、ちょっとこれ話したら親が嫌がるんちゃうかなと、結構、親との関係がいろいろあつても、子どもって親をすごい守ろうとするんですね、大事に。そういった中でも、子どもの微妙な変化に気付けるのは職員の専門性、経験値、スキルですよ。そういったところに、子どもたちが思い切り遊んで自分を表現できる場に、こういう関係性、信頼関係のある経験、スキルのある専門性がある職員がいるということも、すごい子どもたちにとって有用なんじゃないかなというふうに感じています。

縦割りの話、そうですね。子どもたちいうたら、年齢に関係なくというところで、赤ちゃんから幼児さんからいます。上のお兄ちゃん、お姉ちゃん、小学生なり、中学生がすごいかわいがってくれて遊んでくれたりするんですね。そういったとき、自分らがこどもの里でされてきた、または、こどもの里でそういうふうにして上の人が見ている。自分たちも同じことをやる。子どもの世話をしているようで、自分が誰かの役に立っているというか、自分は受け入れられているというか、お互いがお互いにエンパワメントし合っていることには多分、気付いていないと思うんですけど、人それぞれかもしれないんですけど、ちっちゃい子をだっこして癒やされることがあるでしょう。多分、それに近いんじゃないかなと思うんですけど、そういう重要性もすごいあるんじゃないかなというふうに思いますし、高校生になって、社会人になってとかで、20歳そこそこぐらいから社会に出ていろんなことがありますよね。そういったときでも、ちょっと仕事が終わって、たまに里に来て、夜にちょっと職員に愚痴を言ってみたりとか、相談したりとか、制度の中の年齢制限とかじゃなくて、本当に必要としている人がいれば誰でもOKみたいな感じですね。40年続いているんで、こどもの里に来ていた人のその子どもとか、孫とか、2代目、3代目にわたって来ます。自分が、もし親になった、いろいろとしがらみがあってうまくいかないことがある。ちょっとしんどくなってくるというときに、親もこどもの里に相談できるという、そういう面もあるかと思っています。映画を見てもらうと一番早いんですがね。

映画の内容に触れるところは飛ばして。職員さんもすごい全力で毎日遊んだり、勉強したり、食事をしたり、すごい関わるんですね。児童館にいる先生とかじゃなくて、呼び捨てですね。名前とか、あだ名とかで呼び合って、すごい子どもとなじめていて対等な関係で過ごしています。そういったところに仲良くなれるというか、密接な信頼関係ができていくというところもあるのかなと

いうふうに思います。あと、今いろんな大人の人、すごい子どもらは大人慣れしているんですけど、ボランティア慣れというか、すごい慣れているんで、いろんな人が来てくれるんですけど。そういった中で、子どもたちも自分の知らない世界、家庭か学校か、例えば、自分の習い事とかでしか大人の姿ってあまり見ないと思うんですけど。そういったところでいろんな仕事に就いてはる、いろんな語り口を持っている、いろんな生活をしている大人に出会って、子どもたちがいろんな世界を見聞きできるというのがすごい大きいことじゃないかなというふうに思います。

あとちょっと余談ですけど、西成の釜ヶ崎のこどもの里の近くで、こちらの社会事業大学さんのOBの方が居酒屋さんをされているんですけど、僕もしょっちゅう居場所として利用させてもらっているんですけど、きょうはたまたま偶然、こちらのほうに用事があって、きょうも来ていただいているみたいなんですけどね。すごいお世話になっていて。子ども食堂とか、今すごい出てきていると思うんですけど、こどもの里がやっているんですけど、そこのお店屋さん、居酒屋さんは勝手に子ども食堂みたいな感じで、子どものための食堂、中高生とかに居酒屋なんでちょっと絞られるんですけど。里の子が来たら、おなががすいていたら飯食って帰りみたいな感じで、勝手に子ども食堂みたいなこともやられていますね。皆さんのOBさんです。どこにいるかちょっと、いきましたね。

僕、なんでこの映画を撮ろうかと思ったかと言いますと、2008年なんですね。だから、ちょうど10年前なんですね。10年前に、こどもの里と出会いました。一回、社会人をして、映像ジャーナリストみたいなものを目指していました。なりたいたいと漠然と思っていました。映像系の専門学校に、夜間だったんですけど入り直して通うようになりました。さっきも西成、釜ヶ崎、あいりん、スラムやみたいな話をしたと思うんですけど、すごい向こうでは有名なんですよ。本当に、行ったらあかん危険な地域やということで。お金も何

もなかったんで、何か社会性のある、社会問題のあることが転がっている町ってどこやろうと考えたときには、すぐこの西成、釜ヶ崎という町が出てきましたね。

本当に僕は何も考えずに、この600メートル四方の狭い狭い小さな町を歩いていました。ずっとフラフラ歩いてたんですね。うわさにたがわぬ町というか、ド派手な格好をした目つきの悪いお兄さんたちが町の隅々に立っていたりとか、すごいボロボロの格好をしたおっちゃんが毛布を抱えて歩いていたりとか、道で転がっているおっちゃんもいたら、円陣を組んで昼間から酒盛りしているおっちゃんもいて、想像どおりやなと思って歩いてたんですね。ずっと、その町をジグザグ歩いてたんですけど、そのときにちょうど子どもが2人、建物から飛び出してきて、そのときの姿は短パン一丁やったんですね。しかも、はだしで。外は、もちろんアスファルトなんですけどね、道路で。短パン一丁で、靴下もはかず、上半身裸でバーッと2人出てきて、なんか追い掛け合っこして。すごい、言葉が悪いですけど、当時の僕の言葉で言うと、こんな汚い町の、こんな所に、なんで子どもがおんのやろうと、すごい僕は疑問というか不思議だったんですね。僕の前でバーッとなんか追い掛け合っこして、また建物に入っていったんです。それが、こどもの里で。こどもの里って何やねん、みたいなね。全然、福祉だの、社会だの、ボランティアにも一切興味がなかったし、関心もなかったんで本当に無知でした。

そんな状態で、短パン一丁の子どもらに出会い、なんか引き付けられるようにこどもの里の中をのぞいたら、ずっと、こどもの里に通っている、もう30過ぎの重度の脳性まひの障害者の人がいて、ずっと玄関に座っているという特性を持っているんですけど。その脳性まひの子が玄関で、のぞき込んでいる僕の顔を見つめてきて、見つめ合っているうちに職員の人たちがバーッと来て、僕、「こっつて何をやっているところですか」と聞いたら、子どもの遊び場ですと言われたんですね。な

んか皆さん福祉系の人だと思うんですけど、本当に理解できなかったんですね、僕。この西成のこのスラムで、子どもの遊び場って何やねんと思っただけ。今もあまり変わらないですけど、あほやったんで、いきなり「ちょっと代表の人と話ができませんかね」って。ちょうど夏休みの初日だったんですね。ちょうどお昼ご飯というぐらいの時間帯で、忙しい時間に行って代表を呼べ言うてね。荘保館長が下りてきてくれて、すごい失礼な質問をしていたんですけどね。

なんで、こんな所にこんなものがあるんですか。なんで、こんなことをやっているんですか。すごい失礼な質問をバンバンしていたと思うんですけど、最後に言われたのは、子どもが好きやからですと、さらっと言われて。僕もあほみたいな感じで、ずっとたたずんでいたんですけど。なんかほけっと1階の広い所でたたずんでいたら、子どもらが「おまえ、なんでそんなとこ立ってるん？」みたいなね、「暇なんやったら遊ぼうや」みたいな感じで遊びに誘ってくれて、昼ぐらいに行っただけなんですけどね。いったん、当時、6時半に閉館の時間になるんですけど、6時半まで僕はずっといて、なんでこんな初めて来た所で、初めて会った子どもとこんな遊んでんねんやろみたいな不思議な感覚だったんですけど。帰り際に子どもらが、「今度いつ来るの？」みたいな、「また来てや」みたいな感じで言ってくれたり、職員さんらも「また来てくださいね」みたいな。ボランティアって何だという感じだったんで、僕がまた来ていいんですかみたいな感じで、そこからですね。そこから、ちよろちよろ通うようになり、5年ぐらいたちましたね。

映像制作の仕事をしなが、社会人しながら、こどもの里に通わせてもらっていて。映像ジャーナリストというのが目標だったけど、学校とかでドキュメンタリーの映画の世界があるということで、表現力とか、伝達力とか、手法とかに僕すごい引かれていたので、1回ドキュメンタリー映画をやりたいなと漠然と思いつつ、5年が経過していました。僕自身が働く中で、今は自営でやっ

ているんですけど、そのときは勤めをしていたんで、休みの日とか、そういったときのスケジュールを立てる優先順位が、結構、こどもの里に行くみたいなおところになっていて、すごい僕自身、不思議だったんですけども。年々いろいろと考えていって、僕、ボランティアな精神って全然ないんで、僕が楽しいから行っているという感じなんですけど。楽しく行けて、子どもが喜んでくれて、スタッフさんの役にも立てたらええんちゃうかなという感じで通っていたんですけどね。やっぱり、それだけ自分の中で優先順位が高くなっているというのは、すごい僕自身が楽しくて必要としていて、それはなんでかなと考えたときに、子どもたちから、すごいいろんなものをもらっていたと思うんですね。これは言葉では表せないようなものなんですけど、単純に僕は勇気付けられたなとか、自分自身元気になったなとか思ったし、逆に、映画を見てもらったら分かるんですけど、こどもの里もいろんな活動をしているし、釜ヶ崎という町自体も日本で一番貧困らしいですね。

つくられた貧困の町なんですけど、要するに。そういう日本最先端の貧困の町に、だからこそ、それを何とかしようや、みんなで何とかしようやという人たちがたくさん集まっているんですね。だから、さっき言いましたけど、福祉の面でも、僕すごい最先端をいっている町やと思うんですね。そんな町で、僕、この10年いろんなこと、社会のことを勉強させてもらったなあというふうに感じています。そんなこんなで、子どもたちからも、町からもたくさんいろんなものをもらっていて、職員さんにも、すごい子どもたちと日々関わりながら、いろんな課題、子どもたちが抱えさせられている社会課題と向き合って、でも5年も通っていたら、結構いろんなことも知ってくるんで、大変そうやな、この人らはえらいなと思いつつながら見ていました、その背中を。

学童保育の補助金になる前に、大阪は大阪市子どもの家事業というので補助金を出していたんですね、大阪市が。それは0歳から18歳まで無料で、誰が来てもいいよという大阪市がつくって

た制度で、それは、そのうたい文句はすごい素晴らしいなと思ってたし、補助金もすごい手厚いものだったというふうに、荘保さんからも聞かされていたんですけども。それが打ち切りということで、2012年ですか、結局、打ち切りになったんですけど。そのときにも、子どもたちの遊び場、居場所を守ろうと、里の職員さんたちを中心に、すごい社会に対してアピールして闘っていたんですね。その姿がすごい、僕はカッコいいなと思って。こういうふうな、子どもの居場所を守ろうとする大人たちの姿もそうだし、僕が5年間で子どもたちからずっともらってきたもの、言葉にはできないけれども、もらってきたもの、温かさとか、元気とか、エネルギーみたいな、熱量みたいなものを作品を通して伝えられるんじゃないかなと。なんかちょっと、どよんとした社会の中で、こういう子どもたちの姿を見てもらうことによって、ちょっと社会が明るくなったり、社会がよい方向に向かったりとかするんじゃないかなという漠然とした思いで、撮影したいというスイッチが入ったんですね。撮りたいという。

荘保さん、館長に相談したら、僕は断られると思ったんですよ。なぜなら、メディアが嫌いだから。たまに来てやっているんですけども、ちゃらっと来て、ちゃらっと撮って、ちゃらっと帰る。しかも、内容は全然、ここのことを理解してないやみたいだね。メディアに裏切られ続けているって、荘保さんは明日来んですけど、こちらにね。すごい聞かされている中で、僕、勇気を出しての愛の告白だったんですね。割とあっさり、企画書というか、映画の内容を読んでもらったら、いいんじゃない？みたいな感じで、すぐ通ったんで。僕も、こんながっぷり密着して長編を撮るとするのは初めてだったんで、すごいどぎまぎはしていたんですけども、そんなこんなであって撮らせてもらうことになりました。2年ほど撮影して、2016年の映画公開ですね。2年たった今も、こういった形で、自主上映という形で多くの方に見ただけという、これもすごい一つの子どもの持っている力なのかなというふうに思ってい

ます。

あと5分ぐらいで終わるんで、映画が始まりますので、もうちょっとお待ちくださいね。話というか、僕はよく公開したときに、ちょうど貧困対策法みたいなものができたりとか、子どもの貧困みたいなものがすごいメディアで取り上げられていたんで、そういうのをアピールしたくてつくったんですかとか、取材とかを受けてよく聞かれたんですけれども、全くそんな気はなくて、これは映画を見てもらったら分かると思うんですけど。ここに出てくる子どもたち、大変は大変なんですよね。いろんなものを抱えさせられて、すごい大変な状況ではあるんですけれども、それをもはね返すだけの力みたいなものがあったりとか。僕も通っている5年の間で、子どもたちと関わる中でいろんなことを知ったというか、見てはきたんですけれども、普段の子どもたちって、そんなことを感じさせないぐらいすごいエネルギーがあふれていましたね。そういうことが、この映画の中で表れているのかなと思うんですけれども。ものすごい力を持つてる子どもたちが登場するんで、ぜひ注目してもらえればなと思うんですけれども。

子どもの貧困という言葉がメディアの中でたくさん取り上げられて、最近も、キャッチーな虐待死の事件がありましたよね。個人的には、子どもが被害者だったりとか、虐待の事件があったりとか、児童虐待とかでそういう報道が出てくるたびに、まずそんな事件が、皆さん一緒だと思うんですけれども、そこからバッシングが始まりましたね、ネットを中心に。すごい感情論で、表現は何を言おうが自由やからいいっちゃいいんですけど、その感情論だけでパーッと発言しているマスコミもあって、やっても絶対なくなるんですよ、これ。どうしたらいいのかなと考えたときに、もちろん亡くなった被害者、子どものことを考えるとそういうことがあってはならない、許されないことなんですけれども、結局、みんなの思いとしては、そういった事件をなくしたいというところに行き着きますよね。それを考えたときに、どうしたらいいのかなという。加害者が、なんで

殺したかということ突き詰めて考えていかないと駄目だと僕は思っています。

映画の中にも、子ども以外にも親御さん、お母さんが登場してくれたりとかして、いろいろお話ししてくれたりもするんですけれども、親も元子どもで、何かしらんけど20歳になったら大人や、子どもが生まれたり親や、となるんですけれども、その中で社会による責任もあると思うんですけれども、親も元子どもで、いろんな育ちの環境の中で成長していきますよね。いろんな育ちの環境の中で、いろんな経験、傷付きであるとか、裏切りであるとか、そういうのを経験する中で大人になっていく。それが乗り越えられる人もいれば、乗り越えられない人もいるし、乗り越えられないぐらいにつらいことだけど、もし、こどもの里にいるようなすごく信頼できる、自分のことを理解してくれる、話を聞いてくれる、すごい経験や傷やらを学びながら、いろんなものを持っている出会う意味のある大人に、もしも、その元子どもが、親たちが出会えていたら、もし、そんな公的な機関が、今なら子ども食堂とか学習支援とか言うていきますけど。そんな所とか、こどもの里のような児童館とか、そういった公的な場が、その元子どもであった親にあればとか、そういったことをすごい考えたりもしますね。もっといろんな人が関わったり、つながれたり、発見できたり。もちろん制度的に、児相と警察が協力されていればとか、もうちょっと介入して親子分離をみたいな面も大事だと思うんですけど、でも実際問題それをしちゃうと、それも要るし、その制度の強化も要るけど、親なり子どもなりの気持ちを理解する専門家も必要だし、あまりに強権発動しても制度で押しちゃうと、どんどん地下に潜っていただけなんで、より可視化されづらく、見えづらくなる可能性というのがありますよね。

さっきも西成釜ヶ崎とかは、相対的な貧困率の高い町である。それはどういうことかという、可視化されやすいんですよ。こんな、例えば街中とかで1人、ホームレス状態の人がいたとしても、あの人ホームレスなんやぐらいの感覚になる

のかもしれないですけど、釜ヶ崎ってどんどん野宿で寝ているおっちゃんらがいます。もちろん一人一人、人生があって、一人一人いろんな生き方をしてきたわけですけど、そうやって可視化される状態にあるから注目もされる。何とかしようという力学も働く。

こどもの里に関して、いろんな背景を抱えている子どもたちがいるので、そういう子どもたちに対して何とかしようという力学が働くんですね。そういう力のある地域、都市部だったらいいけど、郊外とか、地方とか、そういった所で可視化されづらい家庭の子はどうなるのかな。そういった制度があることによって、強権発動で、例えば親権停止とか親子分離とかするということは、明確に親なり何なりが分かっている、ひょっとしたら潜っていくかもしれない。そういった危険性も考えながら、社会全体でこういう子どもの課題というか、そういったことを共有していくのがすごく大事なのかなと思っています。だから感情一辺倒で、メディアもそれをあおり立ててやっていく、それはそれで自由やからいいけど。もっと多角的に検証して、社会的に制度、児童館の職員の数も全然足りていないし、子どもに関わる大人の数って足りていない状況ですよ。そういったところからも見ていく必要があるんじゃないかなというふうに、僕は思っています。

子どもたちというか、僕自身がこの社会を見て思うんですけど、ある意味しようがないけど、階層化社会というか、階層というか、いろんな出身階層に属する人たちがそれぞれ美徳する世界みたいなものがあって、そういった社会になって分断されているんじゃないかなというふうにすごい感じています。子どもは、生まれる場所は選べないですよ。人生を大切にするというのは、子どもたちが自由に自分の意思でやられているのかと言われたら、僕はそうでないと思います。子どもたちは、さまざまな環境で生まれて育っていきまよ。経済的に恵まれた家庭環境の子もいれば、ちょっと苦しい家庭の、しんどい家庭の子もいます。その中には、家庭のこともそうだけど、暴力、

無関心、育児放棄というかネグレクト、これも虐待ですよ。貧困と言われる経済的な困窮とかも、1人でその子たちが抱えるのは重過ぎる。困難を背負わされて、傷付きながら越えていく子もいると思います。子どもたちはいろんな、それぞれがそれぞれの環境に背負わされて育ちながら、そういうふうな社会の中にある階層、いろんなレイヤーに振り分けられて育っていくんじゃないかなというふうに思っています。

そういうふうに、社会が無意識に出しているレイヤーに振り分けられた子どもたち、子どものときはかわいそうですよ、社会の関心は集まる。恵まれない家庭や、環境的にかわいそうな子というふうに社会は見ています。ただ、さっきも言ったけど、大人になると、社会的な関心が薄くなりますよね。自立援助ホームとか、18前後ぐらいの、20歳前後ぐらいの子どもたちの難しさはそこにあると思うんですよ。社会の関心がなくなるというか、制度保障もなく、大人なんだから自己責任でというふうにパチンとなりますね。こどもの里さんなんかは、すごいまだ子どもたちが大きくなっても関わっていると思うんですけれども、果たして他のいろんなところを見ている中で、それぞれ職員さんが詳しいと思うんですけど、関わりを見ているかと言われたら、なかなか難しいですよ。だって一日、今、関わっている子どもと関わっていて、仕事終わりの時間が来て、帰りますみたいなきに、まだ高校生、社会人の子が来てしゃべる。親が来て相談してくる。ごめん、時間が終わったから帰るわ、とは言えない仕事なんで、そういった難しさもあるのかなとは思いうんですけれども。

大人になると急に底辺みたいなね。学歴、もしくは収入の低いみたいな社会がはびこり続けている階層に、元子どもというか、子どもを振り分けにくるんじゃないかなと思います。そういうふうな社会が目指している階層に振り分けられた子どもたちに芽生えるのって、どうせ自分なんかというか、自己否定の心が芽生えて長期間かけて育っていくというか、そういったことが起きるんじゃ

ないかなと思います。皆さん知っているかなとは思いますが、日本の子どもの自己否定、自己肯定感の低さというのは、世界の同世代の子どもの中でも突出して低いですね。欧米とか、韓国とかもそうなんですけど、7割、8割ですね。自分のことが大切と思えるかみたいなね、7割、8割の子どもがいる中で、日本の子は4割ちよいぐらいですね。肯定感の低い子どもが多いというんですね。こういう自分なんかという感情が、自分に向いたら自死であるとか、自傷行為であるとか、そういったところに向くと思うんですけど、逆に、どうせ自分なんてという鬱屈した気持ちが他人に向けば、それはいじめであるとか、暴力であるとか、そういったものに向かっていくんじゃないかなというふうに思いますし。大人になったらDVとか、そういった形で出てくるんじゃないかなと思ったりもします。

自己責任だと言われることがあると思うんですけども、自分の責任の部分であるというところもあるとは思いますが、そのときに、さっきも言いましたように、育ちの中で出会いがある、理解ある誰かと出会っていたら、その誰かがいればとかね。公的に、そういう誰かがいる場所を保障していたらということを考えてときに、やっぱり自己責任だけではない。社会の責任とまで言わないんですけど、社会全体で考えていって、社会全体でつくっていかないと駄目なものもあるんじゃないかなというふうに、すごい感じています。

僕、この話をしゃべり出したら、たらたらとしゃべっているんで、もう時間があれですけど。今から映画を見ていただきます。ある程度、すじ立てて分かりやすくはつくったつもりなんですけれども、何かを感じてもらえるような映画のつくりとか、もちろん出てくる人たちの力だと思うんですけど、そういったつくりを目指して、この映画はつくってきました。だから、何か感じてもらえたらすごくうれしいです。映画を見て、自分で何かを感じるだけじゃなくて、感じたことをぜひ他の誰かにも共有してみてください。きょう、こんな映画を見て、こんな話でこんな人が出てきて

とか、何でもいいんで誰かと共有してみてください。その共有したものを、どういうふうにしたらいいいんやろうとか、そういういろんな話をしながら広げていってもらって、それが広がりになるんじゃないかなと思いますし、この映画をつくった身としては、そういうふうにしてくれたらうれしいです。

きょうは、こちら映画のパンフレットになっているんですけど、こちらのほうを受付のほうで販売しています。800円なんですけど、フルカラー46ページ。他の長編大作の人気映画のパンフレットなんかは20ページもないですよ。かなり気合をいれて作りました。内容も充実していて、文章から写真から、びっしり入っています。明日、荘保さん来られるんですけど、荘保さんのインタビューを書き起こしたものと、釜ヶ崎の町のこととか、写真やら文章やらでたくさん入っています。ぜひお買い求めいただけたらうれしいなと思いますので、また見本を外に置いていますので、手に取って見ていただけたらなというふうに思います。ということで、すいません。たらたらと、しゃべらせてもらいましたけれども、本当は質疑応答して、皆さんがたの感想を聞くのが一番僕は楽しいんですけども、ぜひ映画を見て何かを感じてください。そんなところで、どうもありがとうございました。

司会 重江監督、どうもありがとうございました。かなり、むちゃなお願いをしていたところがございます。映画をこれから見る、明日、荘保さんが来るということ、そことかぶることは話せないよねというのを前提にお話をしておりましたが。まさに、こどもの里が展開される町、その地域にも触れながら、その中でこのこどもの里、あるいは、その中で重江監督の映画。町中を歩いていて、突然子どもが飛び出してきて何だこれというところから始まった、非常にソーシャルワーカーの必要な領域というふうにも思えるようなエピソードでありました。荘保さんに、映画のお話をされたときに断られるんじゃないかなというふうに

おっしゃっていた部分がありました。これはまさに私たち、こちらをお願いしたいことを、こちらが声を掛ければ、誰でも受けてくれるんじゃないかというふうに思う部分もしばしばあるかもしれないんですけども、その中で嫌な経験があったりすると、そういった支援を拒否するというのもある。恐らく重江さんは、映画のオファーをするまで5年間、こどもの里に関わり続けていらっしゃって、その中でオファーを出されたというタイミングはきっと、おまえなんかには何が分かるではなく、ぜひ撮ってくれという、荘保さんのお答えではなかったのかなあというふうに拝察しました。重江監督、本当にどうもありがとうございます。

それでは、これから10分間休憩に入ります。休憩の後、11時10分から、お待ちせいたしました。『さとにきたらええやん』の映画上映となります。これから、順次休憩に入っていていただいて結構でございますが、映画上映に際して、できるだけ前のほうに詰めてお座りいただければと思います。この講堂は、映画上映用に向いているわけではございませんで、音響との関係で、あるいは映像の大きさという関係で、前に詰めていただいたほうが見やすく聞きやすいかと思っておりますので、休憩の後、詰めて座っていただければと思います。それでは休憩に入ります。